第二講　演習問題(2)

次の文章は、今様を好んだ後白河院が、今様の歌い手である傀儡女（くぐつめ）たちとの交流を記したものである。これを読んで、後の設問に答えなさい。

五月、花のころ、江口・神崎の君、①美濃の傀儡子（くぐつ）あつまりて、花参らアせしことありき。歌沙汰ありしに、「延寿（えんず）、『恋せば』と申す足柄をいまだうたはぬとて、御所に習ひまゐらイせたきを、え申し出でぬと、これかれに聞かれ候ふ」と言ふと聞きしかども、聞き入れぬやうにてありしほどに、季時入道（すゑときにふだう）して申し出だしたり。「②いかでさることはあらむずるぞ。逆さまごとにてぞあらむ。我がためは名聞（みやうもん）にてこそあれど、③かたはらいたし。さはのあこ丸うたふめるは。それに習へかし」と返事に言ふ。延寿また申すやう、「いかさまにも習ひまゐらせて候はむこそ、この世のよろこびにては候はめ。あこ丸は、大進（だいしん）も小大進（こだいしん）もみな知り候はぬを、誰に習ひたるぞと④おぼつかなく候ふ。またこれらも、さ申せば、かたがたに」と申せば、「のちにこそ。これら居るときありて、聞きとられなむずるは。⑤ひとりあらむ時に、さらば教へむ」と言ひしを、「残りとどまりて習はむ」とaいたく言ひしかば、乙前（おとまへ）に「いたく言ふ。いかに」と語りしを、「さ申さば、教へさせたまへ

かし。さやうにいみじがり申さば、さやうの料にてこそ候へ」と乙前申ししかば、夜々二三夜ばかりにぞ b教へたりし。似ウせぬところも、かたはらいたくおぼえて、え直さで、我、良くなるまでうたひてぞ教へし。その後、暇請(いとまこ)ひしに、疾くとてありしをよび返して、うたはエせて聞きしに、「神妙なり」と言はれて、

四大声聞(しだいしやうもん)いかばかり　喜び身よりも余るらむ　われらは来世の仏ぞと　確かに聞きつる今日なれば

とうたひたりしかば、感に堪へずして、唐綾(からあや)の染付(そめつけ)なる二衣(ふたつぎぬ)を纏頭(てんとう)にしてき。⑥をりふしにつけては興がりておぼえき。

かやうに、男女これかれ、我に歌を習ふもの、その数ありしと言へど、みな好みさしつつ、始終習ふものなくて、あひ継ぐものなし。⑦としごろ好みたることに、たしかに伝へたる弟子のなき、口惜しきことなり。

（『梁塵秘抄口伝集』による）

（注）

○江口・神崎の君─江口や神崎に居た遊女。傀儡子同様、今様の歌い手。
○美濃の傀儡子─美濃国青墓の宿を拠点とした芸人。傀儡女。
○花参らせしこと─供花会(くげゑ)。仏前に花を供える法会。
○歌沙汰─今様に関する評判。
○延寿─傀儡女の名。

○『恋せば』と申す足柄―今様の秘曲「足柄」のうちの一つ。後白河院はこの曲を伝授されていた。
○御所―後白河院。
○季時入道―後白河院の近習。
○さはのあこ丸―傀儡女の名。
○大進、小大進―傀儡女の名。
○またこれらも―また延寿の仲間たちも。
○乙前―美濃出身の傀儡女で今様の名手。後白河院の今様の師。
○四大声聞いかばかり〜今日なれば―仏に教えを受けた迦葉（かせふ）・須菩提（しゅぼだい）・迦旃延（かせんねん）・目連（もくれん）という四名の声聞（仏弟子）が、来世に仏になるという保証を授けられた喜びを歌った今様。
○唐綾の染付なる二衣―中国伝来の絹織物を染めて作った袿（うちき）を、二枚重ねたもの。
○纏頭―褒美として衣などを与えること。

問一　傍線部①「美濃」は、現在の県ではどこにあたるか。漢字で答えなさい。

問二　二重傍線部ア〜エ「せ」のうち、使役の助動詞を一つ選んで、記号で答えなさい。

問三　傍線部②「いかでさることはあらむずるぞ。逆さまごとにてぞあらむ」について、次の問いに答えなさい。

（1）「さること」とは、どのようなことか。具体的に説明しなさい。

（2）「逆さまごとにてぞあらむ」とは、どういうことか。わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部③「かたはらいたし」、④「おぼつかなく候ふ」を、それぞれ現代語訳しなさい。

③＝

④＝

問五　傍線部⑤「ひとりあらむ時に、さらば教へむ」と言ったのはなぜか。その理由を説明しなさい。

問六　波線部ａ「いたく言ひしかば」、ｂ「教へたりし」の主語を、次のア〜オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　御所　　イ　季時入道　　ウ　さはのあこ丸

エ　延寿　　オ　乙前

ａ＝　　ｂ＝

問七　傍線部⑥「をりふしにつけては興がりておぼえき」とあるが、後白河院は延寿のどのような行為について、このように思ったのか。「四大声聞いかばかり…」という今様の内容をふまえつつ、説明しなさい。

問八　傍線部⑦「としごろ好みたることに、たしかに伝へたる弟子のなき、口惜しきことなり」とあるが、後白河院は『梁塵秘抄口伝集』の中で、左記Ａ、Ｂのようにも述べている。傍線部⑦およびＡ、Ｂをふまえ、後白河院が本書を執筆した意図を説明しなさい。

Ａ　としごろかばかり嗜（たしな）み習ひたることを、誰にても伝へて、その流れなども後には言はればやと思へども、習ふ輩（ともがら）あれど、これを継ぎつぐべき弟子のなきこそ、遺恨のことにてあれ。

Ｂ　おほかた、詩を作り、和歌を詠み、手を書く輩は、書きとめつれば、末の世までも朽つることなし。声わざの悲しきことは、我が身隠れぬるのち、とどまることのなきなり。その故に、亡からむあとに人見よとて、いまだ世になき今様の口伝を作りおくところなり。

第二講

〈模範解答〉

問一　岐阜（県）

問二　エ

問三　（1）後白河院が今様の歌い手である延寿に、今様の秘曲の「足柄」のうちの一つを教えること。
（2）ただの今様の愛好者である後白河院が、本職である傀儡女に今様を教えるのは立場が逆でおかしいということ。

問四　③　きまりが悪い
④　不審でございます

問五　教えることに本当は気乗りがしていないが、それなりの返答をしてその場を早く収拾させたいと思ったから。

問六　a　エ　　b　ア

問七　仏前に花を供える法会がきっかけで、後白河院から秘曲を教えてもらえた喜びを、仏に教えを受けた仏弟子が、来世に仏になるという保証を授けられた喜びを歌った今様で表した、当意即妙な行為。

問八　長年、今様を好んできたが、きちんと後世に伝えていってくれる弟子がおらず、自分が死ねば、今様は歌なので声の技芸だから形に残すこともできず、自分の死後も伝わるものを書き残したいという意図。

〈現代語訳〉

旧暦五月、花の頃、江口や神崎に居た遊女や、美濃の傀儡女が集まって、供花会〔＝仏前に花を差し上げること〕があった。（その時に）今様に関する評判があった時に、「延寿が、『恋せば』と申します今様の秘曲の「足柄」のうちの一つをまだ習得していないといって、御所〔＝後白河院〕に習い申し上げたいが、申し出ることができないと、この人あの人から耳に入りま

す」と言うのを（私〔＝後白河院〕は）聞いたが、聞き入れない様子でいたところ、（延寿がそのことを）季時入道〔＝後白河院の近臣〕を介して申し出てきた。（私は）「どうしてそんなことがあるだろうか。逆さまのことであるだろう。私にとっては名誉であるが、きまりが悪い。さはのあこ丸が習得しているようだよ。その人に習えよ」と返事に言う。延寿がまた申すことには、「なんとかして（私は後白河院に）習い申し上げますなら、この世の（一番の）喜びでございましょう。あこ丸は、大進も小大進もみんな知りませんのに、誰に習ったのだと不審でございます。また私の仲間たちも、そのように申しますので、いずれにしても（後白河院に習いたいのです）」と申し上げるので、（私が）「後で（教えよう）。この者たちがいる時に（秘曲の伝授が）あっては、聞き取られてしまうだろうよ。（延寿が）一人でいるような時に、それならば教えよう」と言ったところ、（延寿は）「居残って習おう」と熱心に言ったので、（私の今様の師匠である）乙前に「（延寿が）熱心に言う。どうしようか」と話したところ、「そんなに申し上げるのなら、お教えなさいませ。そのようにひどく習いたがって申し上げるなら、そのような覚悟なのです」と乙前が申し上げたので、（私は延寿に）夜ごと二、三夜くらいで教えた。（延寿が私と）同じようにできない箇所も、（素人の私が本職の人に教えることは）きまりが悪く思われて、直すことができないで、私は延寿自身が（理解して）、良くなるまで歌って教えた。その後、（延寿が）別れの挨拶をしたので、すぐに（退出しよう）としていたのを（私は）呼び戻して、（「足柄」を）歌わせて聞いた時に、「すばらしい」と（私に）言われて、

　　四大声聞いかばかり…＝四名の仏弟子はどれほど、喜びが身にも余っているだろう、自分たちは来世に仏になるのだと、
　　　　しっかりと聞いた今日であるのだから。

と（延寿が）歌ったので、（私は）感動を押さえられなくて、唐綾の染付の二衣を（延寿に与える）褒美として与えた。時宜にかなって興趣が深く感じられると思われた。

　このように、男女のこの人もあの人も、私に（今様の）歌を習う者は、その数が多くあったと言っても、みんな興味が途中で薄れて、一貫して習う者はいなくて、後を継ぐ者はいない。長年愛好してきたことに、しっかりと伝えている弟子がいないのが、残念なことである。